公益財団法人　埼玉県剣道連盟『広報誌』

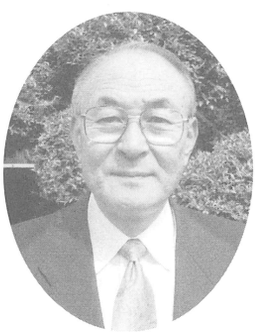
剣風

事務局
〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
http://www.saitama-kendo.or.jp

創刊（公益財団法人設立記念）号　平成23(2011)年11月21日発行

（題字　野澤　治雄会長）

あ　い　さ　つ



公益財団法人　埼玉県剣道連盟
会長　野澤　治雄

このたび、公益財団法人の設立（７月１日）を機とし、連盟60年の歩みをふまえた展望を図りつつ、新たな動向を内外に発信する広報誌「剣風」が発刊の運びとなりましたことは、まことに意義深く喜びに堪えません。

さきに、公益法人制度改革の公示をうけ、現法人への方向性を定めて２年余、法人化推進委員会が組織され、鋭意作業を進めて今日に到りました。

その目ざすところは、法人格の取得による社会的信頼度を高め、新制度の趣旨に沿い、公益目的事業の充実強化並びに普及啓発活動の拡充等を含めた組織・基盤の強化を図ること、具体的には、業務執行理事会４部会（総務・研修・強化・広報啓発）による運営の分担によって、これまでの事業内容の点検・改善事項を事業に反映させ、連盟の前進と発展に寄与するところにあります。

その大義は、人間形成に資する剣道理念の更なる推進にあり、礼節の基盤にある剣道を守り抜く気概を持ち、それを時代の要請と捉えた力強い歩みを続けるところにあると考えます。

かえりみて近年、幼少年から高齢者にいたる幅広い年代層への普及浸透が進み、生涯剣道の実践に打ち込む多くの愛好者を集めて隆盛に進展しており、一方、各種全国規模の大会では、過去10回の国体優勝をはじめとする競技実績を重ねておりますが、今後とも、“頂はより高く、裾野はより広く”と斯道振興に努めつつ、公益に資する財団の役割を着実に担ってまいりたいと存じます。

いま、当連盟の新たなる展望と伝統文化剣道の継承発展に想いを凝らすとき、次代を託す青少年に重きを置き、とりわけ少年剣道の育成強化に力を注ぎ、心を砕いて参りたいと思います。この点で、各加盟団体（37支部５団体）には、支部等振興の柱として、これまで以上に少年育成事業の充実に意を用いると共に、その教育的側面を大切に事業展開をいただきたいと願っており、連盟としては、それを支援する体制を整えてまいりたいと考えております。

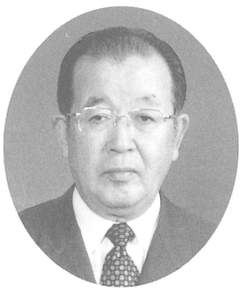
広報誌、「剣風」の呼称は、埼剣連に次なる飛躍の“風”を呼び、ひたすら、“剣”を磨く剣友各位の想いにも応え、示唆に富む内容であることを期待し命名いたしました。限られた紙面の中ではありますが、埼玉の風土に培われた剣道の往時を偲び、明日への展望を拓きつつ、道を求める仲間のその日ある時を伝え、また、剣道の科学的側面や県内各地の話題も折り込んで、心に響く内容として受け止められる事を期待するところであります。

本県には、剣道界に名だたる足跡を残した多くの方々の精神が脈々と受け継がれ、今に生きづいている感を深くします。ここに、今日ある埼玉の剣道を育んで並々ならぬ努力を重ねていただきました先達の皆様に、深甚なる感謝の意を表します。

その心と技を今に受け継ぐ私達は、この土壌を大切に、より深く、より高くと剣に励み、大いなる剣の道に、さらに精進を重ねようではありませんか。

祝辞　「“剣風”創刊号の発刊に寄せて」

公益財団法人　埼玉県剣道連盟
名誉会長　大久保和政



このたび、埼剣連設立60年を迎える節目の年に、公益財団法人としての新たな一歩を記して広報誌「剣風」を発刊し、尚武の気風を受け継ぐ埼玉の剣道を伝承して行くことは、今後の連盟発展への一翼を担うものとの期待が膨らみます。

かえりみて、連盟の草創期には、当時県庁隣接の武徳殿（明治44(1911)年竣工）を拠点に幾多剣士の足跡が記され、敷地内に現存する大銀杏の葉を面に忍ばせ、「勝ち銀杏」として試合に臨んだ話題も残されており、当時の想いをひしひしと伝えてくれます。

この道場に汗して過ぎた日々から、前武道館（昭和42(1967)年建設）への時代にかけては、全県への普及展開も顕著となり、その後二度の国体開催（昭和42年行田、平成16年秩父）での成果はもとより、各種大会で重ねた競技実績等、その日ある時が走馬灯の如く今に蘇ります。

これからの連盟は、今日までの積み重ねの上に、より具体的な取り組みを明らかに、剣道の本義を体し、剣道界ひいては社会に貢献する道を力強く邁進していただきたいと念じております。

さて、さきの大災害、日本と世界中を震撼させて半年余り、今なお厳しい状況下にある人々には心が痛みます。誰しも「何か自分に出来ることは」の想いにかられる中、ひたすら耐え忍び、“絆”を希望の灯にかえて生き抜こうとする被災者の姿勢には、頭の下がる思いがいたします。それはまた、伝統に培われた日本の底力の一端を示すものとして、必ずや復興への原動力になるものと願ってやみません。

ここで、“人間形成の道”を理念として生涯剣道を貫く私達は、謙虚な姿勢を堅持しつつ修行に励み、いま一度社会に果すべき役割に想いを馳せて、これからを見据える必要があるかと思います。

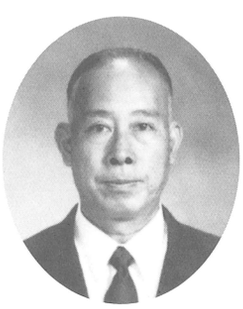
この点で、剣道界を下から押し上げる力となる少年剣道の育成には特に比重を置きたいと考えます。

昨今、ややもすると、少年達に進取の気性が欠け、夢や希望への実現意欲がうすれ、広く世界の舞台を目ざすといった気概が足りないように思われ、気骨ある人材の素地を育む大切さを痛感します。

ここに、指導者の皆さんには、生涯を意義深く生きぬく上でも、この道にさらに精進を重ね、剣風を磨きつつ、人倫の道を進む剣道により深く打ち込んでいただくよう祈念し、祝辞といたします。

祝辞「公益財団法人の設立を祝して」

公益財団法人　埼玉県剣道連盟
相談役　水野　　仁（前会長）



財団法人埼玉県剣道連盟から公益財団法人へと移行し、来年度創立60年目を迎えるにあたり、広報誌「剣風」創刊号を発刊し、初の情報誌として会員の皆様に提供されますことを心よりお祝い申し上げます。

昭和27年、埼玉県剣道連盟創立以来、小澤丘初代会長、佐藤顕二代会長、市川彦太郎三代会長、楢崎正彦四代会長、大久保和政五代会長を経て、不肖、水野仁六代会長へと受け継ぎ、今日を迎えることが出来ました。

先輩諸氏の素晴らしい指導の下、これまでの財団法人から公益財団法人として認可を得ることが出来ましたことは誇るべき快挙であると思います。これも公益財団法人推進化委員会皆々様の力の結集により、その努力が結実いたしましたことに、心より厚く御礼申し上げ敬意を表します。

この移行に際し、法人化推進委員会を設立し、委員長の茂木廣次氏他、関口善行、豊島正夫、松本泰昌、古島孝行、星多喜子諸氏の惜しみない努力で、２年有余の年月を費やし、県教育委員会と幾多の折衝を重ね、またご指導を受けつつ、平成23年７月１日の登記を迎えました。

ここに、新体制のもと心新たにスタートを切ることが出来た次第ですが、会長職を退任するにあたり、皆々様に十分な退任の挨拶をすることが出来ず心残りでありましたが、在任中に温かいご指導とご協力を賜り３期６年を無事恙なく務めることが出来ましたこと、心から厚く御礼申し上げ、今後は、相談役としての役割を果たしてまいりたいと存じます。

思い起せば、60年重ねた修業のはじまりは、高校１年次の昭和26年、高野佐三郎範士の明信館川越分館で間中鹿太郎館長に師事して10年、以来、幾多良師に恵まれ、厳しく限りなく続く深遠な剣の道に触れて今日、これからもひたすら研鑽を積み、「習い、工夫、練る」永遠の剣道に、少しでも迫りたいと願うこの頃であります。末筆ながら、野澤会長を中心に全会員心を一つにして、立派な運営を進め、益々発展されますよう祈念申し上げ祝辞といたします。

「公益財団法人推進化とその道のり」

法人化推進委員会委員長　（連盟　顧問）茂木　廣次

平成20年12月１日、次の法律①法人法 ②認定法 ③整備法(いずれも略称)が施行され、公益法人制度は抜本的に改革された。当連盟は施行日から特例民法法人となったが、平成25年11月30日までの移行期間に公益法人か一般法人のいずれかを選ばなければ、期間満了日を過ぎると解散したものとみなされることとなった。

当連盟は、法律の公布(平成18・６・２)以降、理事会、評議員会等でこの問題にどう対応するかの議論を重ね、平成21年３月の理事会で公益財団法人化推進委員会を設置することになり、下記の者が委嘱された。委員は茂木廣次(委員長)・関口善行(副委員長)・豊島正夫・松本泰昌・古島孝行・星多喜子(書記)の６名で、委員会の都度、山中専務理事、吉田事務局長に出席をいただくことになった。４月７日に委員会を開催、推進化タイムスケジュールは平成23年３月の移行認定を目指し、関係法令、公益認定ガイドライン、公益目的事業のチェックポイント等11種を委員に配布し、５月末迄に習得を依頼、６月以降認定申請に要する原案作成は自宅作業とし、委員会は毎月１回の開催を原則とした。

さて、認定法に基づく公益法人移行認定基準は①公益目的事業比率が50／100以上 ②経理的基礎及び技術的能力を有すること ③法人関係者に特別の利益を与えないものであることである。

作業分担は、定款と定款に基づく細則は茂木、定款の趣意書・細則は豊島、公益目的事業は関口・松本、財務は古島とした。申請書類作成は22年９月頃まで続き、９月26日評議員選定委員会を設置、11月12日に新評議員が選出された。11月１日県教委担当係長から移行認定申請書提出を示唆され、11月30日県教委に申請書(140頁)を提出。12月27日県教委から申請書につき修正を指導され翌年１月に回答。このようなやりとりは５月下旬まで続いた。２月12日の理事会・評議員会で移行認定申請書の正式提出を議決。５月25日寄附行為上の評議員会による新理事の選任が行われ、議事録を県教委に提出した。６月10日埼玉県公益法人認定委員会は当連盟の申請について知事に答申、６月21日に移行認定書が交付された。７月１日に登記が完了し、ここに公益財団法人埼玉県剣道連盟が発足した。この仕事に取り組んで２年３ヵ月、長く難しい作業は終った。この間、正副会長会議・理事会・評議員会は延べ22回開催され、その都度推進状況を報告した。ここに皆様のご協力に感謝、また、親身になってご指導をいただいた県教委法人担当の方々に深く感謝を申し上げます。

委員会の皆さん、専務理事、事務局長をはじめ事務局の皆さんに改めて御礼申し上げ、野澤新会長のもと軌を一にしてスタートした連盟の発展を祈念して筆を置きます。

「業務執行理事会の設置と展望」

法人化推進委員会副委員長　（連盟　副会長）関口　善行

埼剣連は、公益財団法人として６月21日に認定され、７月１日登記完了し、定款、事業の実施、予算の執行等、全ての事柄つまり業務が「公益」という視点で展開することとなった。そして今後の業務は、業務執行理事を中心に進められることになる。以下このことについて述べる。

１　**業務執行理事会の設置**　定款第24条第４項に「代表理事（会長）以外の理事のうち12名以内を業務執行理事とする。」とある。また定款第25条第５項に、「理事会は、業務執行理事の中から、４名の副会長及び１名の専務理事を選出する。」とある。これにより業務執行理事会が設置された。

２　**業務執行理事の業務分担**　定款第26条第４項に「･･･略･･･副会長及び業務執行理事は、理事会において別に定めるところにより、この法人の業務を分担執行する。」とあり、過日の理事会においてその業務の分担が承認され、業務を４部会に分けて分担し、今後はこれに基づいて業務が行われることになる。以下その部会及び内容について主な項目のみ略記する。（順不同）

(1)　**総務部会**　収支予算・決算、各部会の事業計画・実施等のまとめ、会議の調整、表彰、資産管理、必要に応じて加盟団体育成強化。

(2)　**公益事業１（公１）（講習会・県内大会・審査会事業）部会**　講習会では高段位講習会、審議員・審査員講習会、４地区講習会、指導者講習会等。県内大会では４地区大会、埼玉県剣道大会、更に段審査、級審査、称号審査等の事業。

(3)　**公益事業２（公２）（練習会・競技会事業）部会**　国体予選や各種全国大会の予選と選手の選考、更に、これらの選手の強化と全国大会への派遣等。

(4)　**広報・啓発部会**　埼剣連の広報・啓発を担当する。内容は広報ではホームページ、広報誌の発行、新聞等の報道機関への対応等。啓発では、加盟団体の育成等が考えられる。

３　**今後の展望**　冒頭に記述した各種事業は、今まで、主に会長を中心に専務理事及び事務局で立案し各種会議で検討され実施してきた。今後は各事業を４部会が分担担当し、見直し・検討・改善を行い、各部の考え方・意見等を事業に反映させることになる。

平成23・24年度　公益財団法人　埼玉県剣道連盟役員（順不同）

名誉会長	大久保和政	相談役	水野　仁	顧問　鋪野　猷爾・茂木　廣次
会長	野澤　治雄（上　尾）			
副会長	根岸　一雄（東松山）	山中　茂樹（加　須）	関口　善行（深　谷）	豊島　正夫（浦　和）
専務理事	佐藤　義則（特　任）			
理事	久保　和雄（草　加）	矢部　勇介（越　谷）	戸賀崎正道（久　喜）	並木　欣次（幸　手）
	荻田　芳信（川　越）	藤牧　守芳（飯　能）	栗原　憲一（狭　山）	吉野　英明（東入間）
	小倉順二郎（川　口）	中村　好一（大　宮）	青葉元由紀（北　本）	池田　克生（秩　父）
	鶴間　信好（熊　谷）	芳賀　公（警　察）	齋藤　茂樹（高　校）	三日尻幸治（居合道）
監事	大室　泰二（狭　山）	會田　紳次（浦　和）		
評議員	中村　豊孝（八　潮）	鈴木　末男（吉　川）	長谷川裕一（春日部）	齋藤　亘弘（杉　戸）
	篠崎　和男（羽　生）	萩原　宙（行　田）	島崎　隆男（所　沢）	吉井　一祥（入　間）
	渡邉　榮作（西入間）	新井　弘己（小　川）	八谷　忠巌（川　口）	奥田　良一（　蕨　）
	藤田　利雄（戸　田）	千葉　光三（朝　霞）	半田　栄一（鴻　巣）	清水都留吉（寄　居）
	韮塚　雅司（本　庄）	井戸川英進（小鹿野）	小室駿一郎（特　任）	瀧澤　利行（杖　道）
	穐田　清（大　学）			

「大会記録この１年」（４月～11月）全国大会（上位）入賞結果・県予選会結果（報告）

順不同

― 全国大会 ―

○第50回全日本女子選手権（９・25）
優勝　村山千夏（警察）　３位　荒井貴子（久喜）

○第59回全日本剣道選手権（11・３）
準優勝　東永幸浩（警察）

○第53回全国教職員・女子個人（８・６）
優勝　荒井貴子（久喜）

○第58回全国高校・女子団体（８・９～12）
第３位　本庄第一高校

○第66回国民体育大会（10・２～４）
第４位　成年女子・埼玉県

○第44回教育系大学
第４位　女子団体・埼玉大学

○第33回全日本高齢者・個人（６・６）
第２位　渡辺秀男（65～69歳）

○第46回全日本居合道（10・22）
第３位（団体－小宮山・永井・藤村）

○第38回全日本杖道（10・16）
第３位　６段（斉藤・平野）

― 全国・県予選会 ―（開催日順）

○全日本都道府県対抗女子（４・３）
先）千波　次）鈴木　中）荒井　副）栗田
大）堀川

○全国健康福祉祭・団体（４・３）
先）山中　次）島村　中）七田　副）片倉
大）小能

○国民体育大会・男子団体（５・21）
先）藤田　次）米屋　中）奈良　副）森田
大）加治屋
女子団体　先）萩原　中）大場　大）栗田

○全日本女子剣道選手権予選（６・５）
①荒井（久喜）　②村山（警察）　③藤倉（東松山）

○全国高校（６・13, 18, 19）
男子団体　①埼玉栄　②本庄第一　③大井　③熊谷
女子団体　①本庄第一　②与野淑徳　③蕨　③埼玉栄
男子個人　①木村・埼玉栄　②田中・埼玉栄
③持井・埼玉第一　④口田・大井
女子個人　①千波・本庄第一　②有馬・伊奈学園
③荒井・市立川口　④小林・埼玉栄

○全日本都道府県対抗少年（６・18）
①大島（上尾）②佐藤（久喜）③岡（飯能）
③松村（加須）⑤石川（越谷）

○学校総合・中学（全国・関東予選７・25, 26）
男子団体　①北本　②川口青木
③越谷東　③吉川中央
女子団体　①白岡南　②春日部大沼
③川口安行東　③越谷西
男子個人　①江藤・川越霞ヶ関東
②西澤・新座第五
③菅原・川口青木
③内田・さいたま三室
女子個人　①小島・白岡南
②酒井・吉見
③大嶋・桶川
③宮崎・さいたま三室

○全日本剣道選手権予選（９・３）
①嶋田（警察）②米屋（警察）③東永（警察）

○全日本居合道・選考会結果（５・27, ７・31）
７段小宮山（上尾）　６段永井（鴻巣）
５段藤村（鴻巣）

特別寄稿「“勝利”への一太刀」―全日本女子剣道選手権大会に再度優勝して―

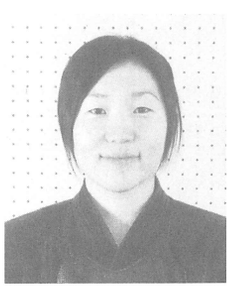
埼玉県警察学校　術科教養主任　村山　千夏

今回の優勝が決まった瞬間、嬉しさとともに信じられないという気持ちで一杯でした。今大会は、特別訓練員として１日のほとんどを剣道に集中できた時とは異なり、今春に異動配置となった警察学校において、学生への指導、育成にやりがいを持って日々を送っていた中での出場でした。ですから、必ずしも十分な準備が出来ての出場ではなかったのです。試合前のエピソードですが、大会へは担当学生に内緒で出場しようとしました。ところが試合の前日、どこで聞きつけたのか、学生達の添え書きされた手ぬぐいが届けられたのです。とても嬉しく思いました。そして、このかわいい学生達に恥じない試合をしようと心に決めました。試合に臨むにあたっては、例え、稽古が十分でなかったとしても、これまでの自分のスタイルを変えずに、自分を信じて、持ち味である「前で攻める剣道」に徹しようと決めていました。決勝まで６試合を戦いましたが、そのいずれも、これまでの出場にはないほど、自然体で臨めたと思います。その中で、特に印象に残っているのは、同じ埼玉県代表の荒井選手との準決勝戦、そして東京都代表の正代選手との決勝戦です。

荒井選手とは、同じ県内に所属していることから、これまで試合や稽古する機会が多く、仲の良い剣道仲間の一人。ですから、お互いに相手の手の内を知り尽くしているライバルでもあります。今回の試合では、荒井選手が得意とする「面」を警戒しました。延長戦までもつれ、幸いにも小手で勝つことが出来ましたが、試合中は楽しく思うほどリラックスして臨むことが出来、このままずっと荒井選手と試合を続けたいと思ったことを覚えています。決勝戦で対戦した正代選手とは、これまで公式戦において一度も勝ったことがありませんでした。ですから、勝利することは難しいと思っていました。試合では、いつも打たれる「引き技」に注意しようと考え、早く「間合いを切る」ように心がけました。そして、勝負どころでは、相手の「技の起こり」を捉えるか、先をかけての「仕掛け技」からのどちらかだと考えていました。この試合も不思議に思えるほど、自然体で臨むことが出来ました。そして、最後は得意の「面」を決めることが出来ました。優勝が決まり、勝利が信じがたく、本当に自分自身びっくりしましたが、とても嬉しかったです。この優勝も、今までご指導していただいた先生方、応援して下さる皆さんのおかげだと思います。ありがとうございました。これからも頑張って稽古に励みますので、ご指導よろしくお願いします。

特別寄稿「全国教職員剣道大会（女子個人）に優勝を果たして」

蓮田市立蓮田南中学校　教諭　荒井(久野)　貴子



私が全国教職員剣道大会に出場するのは、今年で３回目となります。前回・前々回ともに初戦敗退という結果だったので、今年こそは一勝できるように頑張りたいという気持ちで今大会に臨みました。

本大会は８月の夏休みに開催されるため、大会までの間、近くの道場や久喜高校の稽古にお邪魔して、ほぼ毎日稽古することが出来ました。諸先生が私の悪い癖を指摘して下さり、本当にありがたく、しかし大会が近づくにつれ、不安と焦りのせいか、納得のできる稽古ができずにいました。大会出発前の最後の稽古は埼剣連の月例稽古でした。とにかく打たれることを恐れずに、思い切った技を出して前へ行こうと意識して稽古しました。

稽古をお願いした大澤規夫先生に「良い所で技が出ているから大丈夫！自信を持って行ってきなさい。」とご指導して頂き、「思い切った技を出して、自分が納得出来る試合をしてこよう。」と、試合に対して前向きに考えることができました。

試合当日意識したことは、①自分のペースで試合をすること ②得意な所で勝負をすること ③足を止めないこと ④自分が打とうと思ったところは、躊躇しないで思い切り打つことの４点でした。試合中ありがたかったことは、緊張している自分のそばには、いつも先生・先輩達が自分のコートで応援して下さったことです。不安な時、先生・先輩達を見てはパワーを頂きました。いつもガッツポーズをして励まして下さり、「応援してくれる人がいるのだから、がんばろう。」と思うことができました。１回戦から準決勝までどの試合も厳しく、何度も心が折れそうになりましたが、何とか決勝戦まで勝ちあがることができました。決勝戦の相手は山形県代表の佐久間良子選手。彼女とは何度も試合をしてきましたが、いつも分が悪く「負けちゃうだろうなぁ…」と弱気でした。決勝戦まで、３・４時間ぐらい時間が空いたので、色々なことを考えることができました。「負けてもいいから、自分の持っている技をすべて出そう。」と思い、決勝戦に臨みました。

開始直後から終始佐久間ペースでしたが、自分でも驚くほどに、冷静に試合を見ることができました。守りも上手な相手なので、打てる部位はなかったのですが、「絶対にチャンスが来るから焦らずに試合をしよう。」と思うことができました。あっという間に４分間の試合時間は過ぎて延長。周りに目をやると、応援してくれている先生・先輩、家族が目に入りました。「勝負をしないで負けるのでは悔いが残る。絶対に悔いは残したくない。」という気持ちが強くなり、得意な面で勝負しようと決めました。捨て身で打った面が当たり、旗が上がった時は信じられない気持ちでいっぱいでした。優勝することができたのも、多くの方々が私を応援し、支えて下さったからです。これからも精進して参りますので、ご指導の程よろしくお願いいたします。

東永幸浩選手堂々の準優勝 ―第59回全日本剣道選手権大会―

『県勢３選手の戦況を見守って』

埼玉県警察本部警備部機動隊
剣道特練監督　金田　孝行

剣道界最高峰の全日本剣道選手権大会、過去に多くの代表選手が活躍した中で、決勝に進出したのは、昭和63年以来３人目の快挙であった。東永選手は、一回戦から並み居る強豪を撃破し順調に勝ちあがった。準決勝、東京都内村選手に対しての一本目、出小手に来たところを躊躇（ちゅうちょ）することなく、一寸の見切りで抜いて面に伸びると見事に決まった。観衆も思わず声をあげるほど素晴らしい飛び込み面であった。このまま、手堅く一本勝ちで終わって欲しいと思っていたが、そういった心配とは裏腹に内村選手の得意技である出小手や担ぎ面を捌きながら、下がることなく前へ前へと間合いを詰めていった。すると、内村選手が、機と見て目にも留まらぬ速さで再度出小手にきた。やられたかと思ったとき、東永選手は手元を上げずに腕を前に差し出すように相手の小手に合わすと、すかさず面に伸びて二本目の面を奪い決勝戦進出を決めた。胸が空くような醍醐味のある面二本であった。内村選手は、過去２回全日本選手権を制し、世界大会での優勝経験もある。ともに、休日は様々な道場に顔を出し、稽古の虫といわれるほど出稽古を行っている。出稽古に行った先でも顔を合わすなど、お互いを知り尽くした仲であり、また、お互いを尊重している。と云うのも、過去に東永選手から、『内村選手の剣道に対する姿勢は見習わなくてはならない。』といった言葉を聞いたこともあったからである。

決勝戦は、神奈川の高鍋選手である。二連覇を阻止して欲しいという気持ちのなか、一進一退の攻防が続いた。高鍋選手の出端（はな）に東永選手が面に飛び込もうとした刹那、高鍋選手の諸手突きが炸裂した。東永選手も鍔ぜりからの引き胴や出小手に対して、場内も大きく沸き、私自身「どうか、審判旗よ上ってくれ！」と祈ったが、ついに一本にすることができずに、反撃も空しく、無常にも終了の合図となってしまった。

準優勝に輝く東永選手

米屋選手も順調に勝ち進み、今年で３回目の準々決勝進出を決めたが、神奈川県高鍋選手に惜しくも敗れ、嶋田選手は、一回戦を激闘の末勝ち抜くと、二回戦で、京都府の中野選手に延長の末小手を決められ敗退となったが、まさに紙一重の内容であった。

惜しくも埼玉県に天皇杯を持ち帰ることはできなかったが、近い将来必ずや後輩たちが達成してくれることを心から願っている。

※東永選手コメント『準決勝は、いつも通り自分のスタイルを貫くことだけ考えていた。あれこれ考えず、正々堂々と勝負したいと思っていた。打った面二本については、自分でもどのように打ったのか覚えていません。

決勝戦は、埼玉県代表として恥じることの無いように試合することだけ考えていた。高鍋選手は、誰もが認める選手で、胸を借りるつもりで臨みました。結果は突きを打たれて負けましたが、すがすがしい気持ちで大会を終えることができました。

来年は、特に気負うことなく、いつも通り日々の稽古に全力で取り組みます。また、予選を突破して、全日本選手権大会に出場できれば幸せに思います。今後とも、皆様のご指導よろしくお願いいたします。』

埼玉の剣道　「剣聖　高野佐三郎伝」

埼玉県剣道連盟　理事
秩父剣道連盟会長　池田　克生

創刊号に高野佐三郎先生が取り上げられ執筆の機会を得た。先生については、これまでにも偉人伝として幾多の評伝が記されており、今更語る難しさを痛感する次第であるが、我が郷土秩父に縁の深い先生であり、諸先輩から伝え聞いた話を中心に先生の足跡を振り返る次第である。

○生い立ち　高野佐三郎は父芳三郎（秩父絹の検査役・剣道家）母けいの長男として文久２年(1862)６月12日に生まれた。住居は秩父郡大宮郷(秩父市)の秩父神社境内にあり、剣道場(明信館)を備えていた。

祖父佐吉郎(苗正（ミツマサ）)は江戸の中西道場(小野派一刀流)で修行を積んだ剣士で有名な剣術家であった。祖父は母けいが身ごもると大変喜び、毎日身重の母けいを道場の師範席に正座させ、門人の猛稽古を観察させた。

○手ほどき　祖父は誕生を喜び、大きな期待とともに成長を待った。

佐三郎が３歳になったとき、桐の木で造った木刀を持たせ、小野派一刀流の稽古を始めた。稽古は工夫に富んだもので、丁寧な根気強い指導が続けられた。最初は道場での普通の稽古であったが、慣れてくると道場に大豆を撒き足さばきの稽古、防具を着けて足場の悪い川の浅瀬での打ち込み稽古、ある時は目隠しをしての稽古も行った。

自分から「稽古をお願いします」と言う場面もあった。稽古後のお菓子のご褒美は佐三郎の楽しみの一つだった。

○「奇童」の賞賛　佐三郎５歳の時、忍（オシ）(行田市)の藩主松平下総守忠誠（タダサネ）公が秩父の領地の巡見に来た。その折、佐三郎は祖父苗正と小野派一刀流の組太刀58本を見事に披露した。藩主は幼い子どもの腕前に驚き、賞与として銀子一封に「奇童」の二字を添えて与えた話はあまりにも有名である。11歳になると、祖父の剣道指導に加えて、漢文と書道を秩父今宮神社塩谷儔（ヒトシ）宮司に学び、文武両道に励んだ。

○一念発起　明治12年(1879)４月、18歳の佐三郎に大転機をもたらす事件が起きた。

児玉郡賀見村(上里町)の陽雲寺境内で奉納試合の上武剣術大会が開催され、埼玉・群馬の多数の剣客が集まった。佐三郎は祖父苗正の代理として出場した。その対戦相手は、

元安中藩剣術取締役助教授の岡田定五郎であった。

佐三郎は得意の上段に構えて立ち向かった。岡田に得意の諸手突きで攻め込まれ、のどを突き破られ惨敗した。

無念の佐三郎は帰宅するなり決心し、その夜家を出て西も東もわからぬまま一日一夜歩き通して東京に向かった。

○山岡道場(春風館)入門　佐三郎は以前から尊敬していた山岡鉄舟の門人になった。早朝の拭き掃除、朝稽古、午後の稽古、夜の稽古と一日も怠ることなく数年間の精進の後、七日間立ち切り千四百回の試合という最誓願を達成した。その結果、師匠からの信頼も厚く道場の代稽古(師範代)に推挙された。鉄舟からは「人に勝つには技より心にある」と教えられた。

○指導の先駆者として　明治18年９月27日祖父の逝去に伴い帰郷し、秩父明信館で剣道を指導。明治19年春、恩師鉄舟に招かれ警視庁剣道世話係として勤務。明治21年８月、鉄舟の死後帰郷するも、10月から埼玉県警察本部勤務。浦和に住居と道場(明信館)を建て家族と移住。警察での指導をはじめ埼玉師範学校の学生に指導。明治28年、日本武徳会が設立され、総裁から地方委員を拝命、埼玉の剣道発展に寄与した。佐三郎の30代の活躍は顕著であり、明信館は県内外に46支館を数えた。その後、九段下に明信館を、神田に修道学院を実業家澁澤栄一の援助で開設した。さらに、埼玉県巡査教習所武術教授、東京高等師範学校、埼玉県師範学校、陸軍戸山学校、早稲田大学、東京高等工業高校等多くの学校の教授・講師を歴任し子弟の育成にあたった。特に、東京高等師範学校の教授として中等学校の剣道教師の育成に努め、剣道が正科として教育に取り入れられた功績は偉大である。

○日本帝国剣道形制定　明治45年(1912)日本帝国剣道形制定にあたり、調査委員兼主任を委嘱され、それまで各流派により異なっていた剣道形の統一作業に中心となり尽力した。数回の修正の後、大正６年完成に至った。その間に、大正２年日本武徳会より「範士」の称号を授与された。大正４年には近代剣道の基本とされる名著「剣道」を発刊した。

○押し手と引き手　これは昭和20年先生が秩父に疎開で戻られた頃、直接ご指導を受けた故飯島重裕先生が教授された話で、現在も秩父明信本館の指導指針となっている。

「剣道は自然体で動作しなければならない。道を歩いて右足を出して止まったときの姿勢が自然体だ。打っても突いても自然体が崩れてはならない。中段の構えは手ぬぐいを絞るような気持ちで、左手はしっかり握り、右手は添え手と言って力を入れてはならない。右手は押し手、左手は引き手で、打ったとき右手はどこまでも延ばし気味に、左手は引き気味で手の内を締める。」

私の小学校の通学路には秩父神社の裏手にある柞(ハハソ)の森が含まれ、中程に古めかしい井戸があり「高野佐三郎産湯の井戸」という看板があった。ここに生家と道場があったという感慨は今でも深い。平成16年第59回国体剣道競技がこの地で開催されたことも記憶に新しい。

(※参考文献「剣聖　高野佐三郎」飯島重裕著)

加盟団体紹介 (その①)

加須剣道連盟　－次世代を担う子供たちの育成と「交剣知愛」－

会長：山中　茂樹　　事務局長：関口　隆

1　地区内道場・剣友会　{名称（代表者)}

大利根剣友会(鈴木勝義)　金子道場(金子信昭)　北川辺剣道クラブ(佐藤勝男)
花崎剣友会(岩田　章)　加須振武会(田中善高)　騎西尚武館(橋本昌明)
志多見少年剣友会(酒井　正)　隆武会(関口　隆)

2　支部の現況と抱負

加須剣道連盟は、ここ数年「加須市合併（加須市・騎西町・北川辺町・大利根町)」に伴い、体育協会の合併や施設の利用、大会の開催等々の事象により、組織の変革が急務でありました。発足以来60年間続く創始の心を継承しつつ、山中会長の下、「人間形成の道」として剣道の普及・発展の為に協議を重ね、会員一丸となって活動しております。

ホームページの開設やメールによる情報発信等を利用して、会員相互の情報の共有化を進め、大会や各種講習会の参加率が上昇するように努めております。又、特に次世代を担う子供たちの健全な育成に力を注いでおり、毎月第二土曜日に地区内道場剣友会の子供たちが一堂に会し、合同稽古会を行っています。又埼玉県剣道大会等の予選会には、全ての子供たちが参加し、代表を選出しています。そして合同稽古終了後は、一般会員も「交剣知愛」の汗を流しております。

当連盟からは、全国大会の優勝や入賞者を数多く輩出しています。又小学生・中学生も様々な大会で輝かしい成績を収めております。中学生の活躍を下記に掲載します。これからも、「交剣知愛」の気持ちを忘れることなく、会員が一致団結して活動してまいります。

多くの子供たちが剣道を愛し、剣道を継続し、剣道を通じて心と体を鍛え、立派な社会人として成長することを願っています。

(文責：理事長)

○中学校の主な戦績（平成元年～)

男子　全国大会出場：大利根　３回　　関東大会出場：大利根　10回・騎西　１回・加須平成　１回
女子　全国大会出場：大利根　６回(３位２回)
　　関東大会出場：大利根　15回(優勝１回・３位３回敢闘賞３回)・加須平成　２回・加須東　１回

入間市剣道連盟　－和の心で誠の道を－

会長：荒井　恵久　　事務局長：吉川　義勝

当連盟は昭和42年に創設、現在傘下の９つの剣友会がそれぞれに活動、中体連の部活動の子ども達を加えると会員数は455人となっています。第二代会長の滝澤寛夫先生が剣道発展に大変熱心な方で、市内各地域剣友会の創設に尽力され、現連盟の基礎を築かれました。平成４年には念願かなって入間市武道館が建設され、入間市武道連絡会（剣道、柔道など10の武道で組織）を中心に連日賑わっており、県西部地区の月例稽古会にも毎回利用いただいています。当連盟は他県の剣士の皆さんとの交流を深めるため、隔年他県の連盟に親善稽古会をお願いしており、本年は佐渡市剣連へ伺い、上越市、千曲市の剣連の皆様にも参加いただき、大変賑やかな稽古会となり、今後も是非継続の所存です。

平成24年度から中学校における武道の必修化が決定していますが、それに先立ち、平成22年度そのテストケースとして入間市教育委員会が県の指定を受け、市内東金子中学校において本年１～３月の間、70時間の全校生徒を対象にした剣道の指導を行い（剣連に４人の講師派遣依頼）、全校生徒が防具を着けて打ち合えるまでになりました。毎年実施している剣道教室には、市の広報紙、各学校へのチラシ等で募集したところ、平成22年度には50人を超える参加がありましたが、今後連盟の重要課題として「底辺の拡大」を掲げ、連盟の内部組織として剣道普及委員会を設け、古き良き時代の日本人の心を一人でも多くの子ども達に持ってもらうため、剣道人口の拡大に鋭意取り組んでいきたいと考えています。

「栄冠、いまここに」　越谷チーム同志で団体決勝　―県剣道大会小学生の部―

第９回大会（10・23）参加50チームの優勝を競ったのは、越谷Ａ（佐々木葉名・飯塚祐太・丸尾勇太・高嶋怜奈・石川雅）と越谷Ｂ（池田莉菜・熊木照太・小林幸多朗・西田大紀・池田浩気）の両チーム。なんと、結果も共に同点｛１（２）－１（２）｝の代表戦決着で越谷Ａ。

個人でも、３年生の部で小川真英さんが優勝。５年生の部では、長谷川勇輝君が第３位に輝いた。

「この結果は、連盟で多年にご協力いただいた方々の育成強化の賜物です。感動をくれた子供達に感謝します。」と石川雅久監督。

Ａチーム大将石川雅君は「全員で勝ちとった優勝なので本当に嬉しいです。良い仲間と良いライバルに感謝して、これからも稽古に励みたいです。」

――写真は、喜びに沸く全越谷選手団――

スポットニュース

「竹刀の断面の研究」で“知事賞”

川口南中　吉口南さん（研究内容一部紹介）

部活練習中に素朴な疑問を抱いた。「なぜ竹刀は四角形なのか。」仕組みを理解するため、竹の枚数を変えてミニチュア竹刀（全長45センチで、竹板は、３・４・５・６枚及び円）を製作、竹刀に鉄棒で均一の強さを加え、その時の断面の変形の仕方、手ごたえ、しなり具合を測定した。各実験を進めると、四角形と六角形が衝撃につぶれにくいと分ったが、６角形は製作が難しいうえ修理も容易でなく、四角形では、竹刀を構成する竹板の両側面には約45度の傾斜があり、この傾斜で、各板がズレる事によって衝撃を受けとめ、「中結い」でズレの量を出来るだけ小さくしており、「だから四角形なんだ。」「先人の知恵は素晴らしい。」と実感した。

この結果、竹刀の断面が四角形なのは、①正方形という構造自体の強さ、②他の多角形と比べての部品の耐久性、③操作性や取り扱いが容易等、求められる役割・バランスがうまく取れていると結論づけた。

＝以上、研究発表内容、科学教育振興展覧会記事抜すい。図解入り詳細内容は改めて紹介したい。＝

あとがき　埼剣連の息吹を伝える広報誌「剣風」が発刊の運びとなった。限られた紙面の中で、明日を拓く連盟の動向を発信し、日々に剣を磨く剣友の姿や想いも届けつつ、幅広く剣道を捉えて編集を進めたい。

次号からの、新たな企画を注目いただきたい。この広報誌が、少しでも心に響くものとなるよう願いつつ。（豊島）